



図1 膿疱性乾癬に伴う関節炎

a: 全身の皮膚を鱗屑を伴う紅斑がおおった紅皮症の状態
b: 両側足趾すべてに関節炎を認める。



図2 乾癬性関節炎

a: 右 III, IV 足趾の指趾炎
b: 乾癬の皮疹は前額部の一部にのみ認める。



乾癬性関節炎は乾癬のただの一病型？

多田 弥生

帝京大学医学部皮膚科学講座主任教授

乾癬の病型として、尋常性乾癬、滴状乾癬、乾癬性関節炎、乾癬性紅皮症、膿疱性乾癬の5つが知られている。この中で乾癬性関節炎は、関節炎が生じる病型である。一般的に乾癬の皮疹が先行して、10年ほどで関節炎が出現するといわれている。皮疹面積が全身の10%以上の乾癬では関節炎の発症リスクが高く、さらに、乾癬性紅皮症、膿疱性乾癬といった皮膚および全身の炎症が強い病型では関節炎の発症リスクが高いことが知られている(図1)。

以上から、乾癬性関節炎は炎症が強すぎて皮膚のみならず関節にも炎症が飛び火した病型と考えると理解しやすいと思っていた。実際、主に海外からの報告ではあるが、乾癬性関節炎はぶどう膜炎や炎症性腸疾患といった他臓器病変も合併しやすいことが知られており、これも炎症が他臓器に飛び火した結果とも理解できる。一方、乾癬性関節炎の側からみると、皮疹面積が2%以下の患者が全体の

半数以上を占めており、典型的な乾癬性関節炎ではむしろ皮疹をみつけることがむずかしい。軽微な皮疹や爪乾癬だけを有する乾癬性関節炎の患者は整形外科やリウマチ内科に行くことが多いが、こうした症例の乾癬の皮疹探しは難度が高い(図2)。みつけても「これを乾癬の皮疹とっていいの？」と悩むことが多い。つまり、皮疹も掌蹠膿疱症の掌蹠外皮疹同様、鱗屑や浸潤が軽微で、逆に関節の炎症が皮膚に少し及んでできた皮疹といった印象である。典型的な乾癬性関節炎の主役は関節といった印象があり、乾癬の主役が皮疹であるのとは異なると感じている。

こうした患者は早期発症例も多いため、遺伝的素因が大きいように感じている。背景にある遺伝的素因の研究が進むと、将来的には発症予防というところに行き着けるのではないかと期待する乾癬の「病型」である。